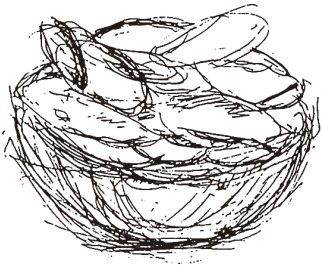
◆戦時下のくらし◆



おばあちゃんの戦争体験

孫　伊藤久仁
おばあちゃん　青山さと
（七十八才）

――おばあちゃん、戦争のことで、今いちばん覚えていることは何。

「そりゃあ、食べ物のことさ。子どもが多かったし、食べ物は手に入らないし、いつもいつもおなかをすかしていたもんさ。苦しかったんだよ。」

――どんなふうに。

「なんでも配給でね。家族の人数分だけ、米とか野菜とかをもらいに行くんだ、配給はいつもおくれてばかりいたし、ほんの少ししかもらえなかったね。米はほんの少しだし、米の代わりだといって、小さなかぼちゃとか、じゃがいもを切ってほしたものなんかが配られたもんさ。米が少ししかもらえないから、いつもおかゆにして、配られたものや、さつまいもを入れて量をふやすんだよ。中には雑草を入れていた人もいたね。つぶの残ったごはんなんか、めったに食

べられなかったよ。」

――いつもそんなものばかりでは、栄養もとれないし、困ったでしょうね。

「栄養どころか、おなかもふくれないから、大切にしていた着物なんかを田舎へ持っていって、米や野菜や魚と交換してもらうんだよ。お金なんか持っていってもだれも代えてくれんからね。何よりもまず食べ物だったさ。」

――雑草まで食べたというけれど、ほかにはどんなものを食べたの。

「いちばんよく覚えているのは、おこのみ焼だね。空襲が終わった時なんか、『よかった。これで今日も命があった。』と思う。そんな時に、大切にしまっておいた麦をどんぶりに一杯出してくるんだ。そして、おじいちゃんに相談して、粉にするんだ。水でわってから火ばちの上で焼くんだが、おこのみ焼といっても、ほかには何にも入れないんだ。けれども、おいしかったね。あんまりおいしくて、のどが『キュッキュッ』となるんだ。こんな話は知らない人もいるかもしれないね。何しろ雑草を食べていた人が多かったからね。配給だけでは、とても生きていかれないから、いろいろ工夫をして食べ物を手に入れたもんだよ。おじいちゃんがリヤカー一杯のわかめを手に入れてくれた時は、うれしかったね。おかゆの中に入れて食べたんだが、とてもおいしかったよ。ゴムでできた地下たびを焼津（やいづ）まで持っていって、さば二十本と交換してもらったこともあった。けれども、いつでもおなかはすいていて、『いつでもおなかは借金中』だったさ。」

――ほかにどんなことで困った。

「おふろへなかなか入れなかったことだね。まきが手に入らなくてね。となりの家なんか、ついに子どもの教科書まで燃やしたそうだよ。せっけんもめったに手に入らないから、手も顔もがさがさになってしまってね。体中しらみだらけになって、頭なんかしらみの卵でまっ白になっていたよ。」

「でもね。食べ物に困ったり、おふろへ入れなかったりしても、生きていられたからね。」

――こわいめにあったの。

「空襲はこわかったね。焼夷弾が落ちると『パチパチ』という音がして、あたりが一面にまっ赤になってしまうんだ。この周りはまだ良かったけれど、名古屋はひどかったね。名古屋が空襲にあうとこの周りも昼のように明るくなってね。すぐ近所にも焼けてしまったところがあるよ。だから、家具なんかは、ほとんど田舎へ送ってしまっていたよ。」

「でも、うちは本当に運がよかったよ。お父さんなんか広島（ひろしま）に原子爆弾が落ちた時、ちょうど柱の影にいて助かったっていうしね。親せきにも兄弟四人全部死んでしまった家もあるしね。」

――学校へはみんな行ったの。

「ほとんどの人が上の学校へ行けなかったね。行ったとしても軍需（じゅ）工場で兵器を作らされたから勉強なんかできなかったよ。それに、学校で畑を作って野菜をとったりしていたからね。」

「まず命。その次に食べ物。それだけを考えていたね。赤ちゃんがいる家なんかは本当に困っ

たもんだよ。お母さんに栄養が足りないから、お乳が出なくてね。赤ちゃんも大きくなれなかったよ。」

「本当につらくて、苦しい毎日だったよ。」

（西春日井郡西枇杷島町在住）

銃後の苦しかった生活

鬼頭　栄一

日本国民にとって、日中戦争とそれに続く太平洋戦争の時代ほど、国家というものの重みを感じたことはなかった。

一九三二年（昭和七年）に始まった満州事変より戦争が次から次へと広がっていった。物の少ない日本と物の豊かな国とのたたかいであるから、戦争のようすはだんだん悪くなってきた。一九四二年（昭和十七年）になると軍部は銃後（戦場に行っていない国民）に決戦体制を強く押しつけた。

＜決戦体制＞

軍需工場には、大学生から国民学校（今の小学校）の上級生にいたるまで動員されて働くことになった。十四才から四十才の結婚していない女の人は勤労挺身隊として、勤労動員にかり出された。